

はじめに

この著書の目的は、まず、龍馬の行動を支えた彼の思想性を明白にすることである。

龍馬の伝記、小説、テレビドラマ等は、最近ブームとなっている。しかし、千頭清臣著『坂本龍馬』（大正三年）と数冊を除いて、その多くは、彼の生き様の素描にすぎなく、思想性に乏しい。確かに、短い人生をダイナミックに生きた龍馬の生き様は、それだけでも、読者や視聴者の心を捉えて離さない。

しかし、それだけでは、彼の生死を賭した偉業の本当のすごさを伝えることは出来ない。彼の行動に思想性を結びつけることによって、はじめて龍馬の真髄、彼の反権力の真骨頂が描けるのではないか。すくなくとも私はそう考えている。

次に、私達は、いまの我国の現状（領土問題、憲法改正論議、原子力発電、社会保障と雇用の問題等々）に一市民として向い合う時、私達日本人にとって国家とは何か、また、政治的デモクラシーとは何か、その本質について考える必要がある。

かつて、龍馬は、幕末期の激動の時代、身分格差のない平等な社会を求めて、命がけで奔走した。その龍馬の行動を支えた反骨精神・反権力思想（デモクラシー）は、今の私達に、その本質について考えさせるものがあるのではないか。いま一度問いかけてみる価値がある。

龍馬の反権力思想とは、徳川幕藩体制に対するアンチ・テーゼとしての政治的デモクラシーの理念である。幕藩体制における国家とは、徳川家の私的な国家にすぎない。その国家を維持するための政治体制が封建的身分制度であった。龍馬の反権力思想は、これらを一掃し、まず、徳川の私的な国家を公の国家・日本（皇国）とすることであり、そして、その新しい国家は万民平等の理念に基づく政治的デモクラシーの手法によって運営されるべきものであった。従って、ここでいう彼のデモクラシーの理念は、平等観・主権在民、共々徳川幕藩体制に対する反権力思想そのものであった。

龍馬は行動の人で思想家ではない。しかし、彼は思想的にしつかりした羅針盤（理念）をもっていた。それゆえ、彼は、約二五〇年も続いた封建的身分制度に支えられた幕藩体制を崩壊せしめた「薩長連合」や「大政奉還」といった天下国家を動かす指導的な活動が可能となったのではないか。

こうした龍馬の反権力の思想はどのように形成されたのであろうか。彼の政治思想をあらわした文書には、かの有名な『船中八策』『新政府綱領八策』、そして、まだ一部の研究者の間でしか知られていない龍馬暗殺後に出版された『藩論』（明治元年）がある。

それらについて簡単に触れておきたい。『船中八策』は幕府の大政奉還を実現させるための基本理念。大政奉還後に書き改めた『新政府綱領八策』は新しい日本の国家像を改めて確認した覚

書。

『藩論』は日本人が日本人の立場で最初に提起したデモクラシーの思想。その内容は、天皇の絶対性を否定し、「入札」(選挙)をもって新しい国家の指導者を選び(主権在民)、上・下二院制からなる議会制を提唱している。なお、駐日英国公使H・パークスは、この『藩論』の近代的な思想性に感動し、これを英国外務省に公文書として送付している。

私はこうした文献を中心に彼の反権力を支えた思想と今日につながる思想的原点を考えたいと思っている。

『船中八策』・『新政府綱領八策』・『藩論』を中心とした龍馬の思想形成と後世に与えた影響について、私は、『近代日本の反権力思想——龍馬の『藩論』を中心に』(法律文化社、一九八六年)の著書でまとめ上げ、この分野での研究は私なりに完結していた。にもかかわらず、今回あえて出版したい私の思いがある。

『藩論』は、出版された明治元年以来、我国の歴史的な転換期(国会開設と憲法制定前後、大逆事件後、大正デモクラシー、太平洋戦争前後、戦後デモクラシーの台頭期等)において、その声は小さいが、かならず登場している。そして、各時代におけるその訴えに秘められた想い、つまり、『藩論』の理念を世に広く知らせたいという切実な願いは、『藩論』研究の創始者・千頭清臣から始まり、私の『藩論』研究の恩師、同志社大学元総長・住谷悦治先生に至る一貫した姿勢であった。そして、今日、この混沌とした我国の政治社会は、まさに歴史の転換期ではないか。

私は、龍馬の思想的なすこみを改めて提起したいと思っている。私はこの著書を一人でも多くの人々に読んでいただきたい。そのために、私は、今回の執筆に当り、次の点に留意した。(1)龍馬達の模索した自由・平等・デモクラシーを中心に可能な限りシンプルに書き下した。(2)龍馬の思想形成の背景について、土佐藩固有の封建体制、土佐の風土、さらには、坂本家の家庭環境等を中心に整理した。(3)H・パークスが公文書として英国外務省に送付した英文HAN・RONのキーワードとなる訳語の一つ一つから『藩論』の内容が、当時、いかに西洋の近代思想に近い考え方をしていたか明白にした。

そして、日本人が日本人の立場で最初に主張し、当時の駐日英国公使達をも驚かせた「自由と平等」「政治的デモクラシー」の理念について、いま一度、その重みを噛みしめていただきたい。それは、私一人ではなく、『藩論』研究にかかわってきた先人達の切なる願いでもある。